

登校拒否への理解を深めてもらおうと、「山梨不登校の子も持つ親たちの会(ふどうの会)代表の鈴木正洋さん(68)＝笛吹市二宮町＝が冊子「登校拒否・不登校 その意味と対応」子どもを信じて待つとはを発行した。登校拒否に悩む多くの親から相談を受けてきた経験を基に、登校拒否の子どもの心理状態や、親の適切な対応などを具体的に紹介。苦しむ親たちに子どもを信じて待つことの大切さを伝え、登校拒否への社会の偏見がなくなるようお願いを込めている。

「山梨親たちの会」代表・鈴木正洋さんが冊子出版

ふどうの会発足から6年間、登校拒否に悩む150組の家族から相談を受けてきた鈴木さんは、子どもと親の心理状態や行動パターンに共通点があることに気付いた。冊子にはその共通点をまとめ、登校拒否の子どもの特徴や回復までの道のり、親が取るべき対応などをまとめている。

「登校拒否は心の傷。外傷と同じで回復には時間がかかる」と鈴木さん。しかし、多くの親は早く学校に行くよう促す。「学校に行きたくても行けないのが登校拒否。苦しんでいるのだから、無理強いしては追いつめてしまう」

一番の支援者は親。学校に行かなければ進学も就職もできない。子どもは明日の見感だから、納得して受け入れるこ

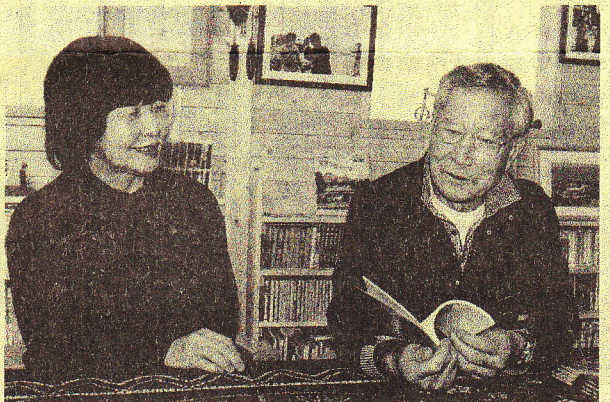
登校拒否の悩み… 「子を信じ待つ」

対応紹介「偏見なくす一助に」

(2)が中学1年で登校拒否になったときに適切な対応ができなかった。妻のはつみさん(62)は最初は絶望感しかなかったと振り返り、登校拒否について学ぼうちに正輝さんの苦しみを理解でき、学校に行けない状態を素直に受け入れられたという。「息子からは『お母さんが変わって、僕も楽になった』と言われた。子どもは敏感だから、納得して受け入れるこ

地域の力も重要

鈴木さんは「頑張る意味を自分でつかまないと、また登校拒否を繰り返してしまう」と指摘し、は



発行した冊子を眺める鈴木正洋さん(右)とのはつみさん。登校拒否に悩む親に「テキストのように使ってもらえれば」と話す＝笛吹市二宮町



「登校拒否・不登校 その意味と対応」の表紙

冊子に掲載されている「親の対応集」の抜粋

■共感
苦しみやもがきを親がわかってもらう気持ちが子どもの心を癒す基本的な道です。子どもの心を感じ取って、「そうだな」と共感してあげることです。

■寄り添う・見守るとは
「この場所に子どもが居ただけいてくれればいい」、そう親が思えることが大事です。子どもの心に近づく努力を重ねることが「見守る」ということです。

■親が学ぶこと
学んだことで親が変わるということは、悩みや不安が無くなるということではありません。その不安や悩みと向き合っているようになることです。

■学校との対応
感情的にならず、登校拒否について理解してどう伝えるか工夫します。できれば1、2カ月に一度学校を訪ね、「家で子どもはこんなふうに過ごしています」と伝えます。

冊子は700円で千部発行。子どもとふどうの会の問い合わせは鈴木さん、電話0553(44)5078、ファクス0553(44)5079。

